

南方熊楠にとつての説話研究

飯 倉 照 平

一、はじめに——柳田国男の回想

平凡社版『南方熊楠全集』全十二冊の刊行されたのが一九七一年から七五年にかけてで、すでに二十年ほど前のことになる。それに一年ほど先立つ一九七〇年から七四年までの四年間、わたしはその校訂の仕事をしていた。

中国の古い本や漢訳仏典から引用された漢文を、まず原文にあたり、それを読み下し文に直すことが、最初に依頼されたことであった。これは全部で四百字詰で約二千枚ほどの分量になった。わたしの原稿は、当時京都大学にいた入矢義高先生に校閲をお願いし、丹念に朱を入れていた。それから、文章の表記を改めること、また中国以外の日本などの本の引用も、できるだけ当たること。これらが校訂の作業内容で、それまで専任となっていた『中国』といふ雑誌の編集もやめ、その仕事にかかりつきりになった。大学へ勤めるようになつたのは、その仕事が終わりかけてからであった。

*

南方熊楠はふつう博物学者といわれるが、その関心は実にさまざま

まな分野に向かっていた。七十四年の生涯でいちばん時間をさいたのは、粘菌やキノコなどの植物採集と図譜つくりだったと思われる。しかし、近年ごく一部分が印刷されただけで、その大半は他人の目にふれる形とはならなかつた。したがつて、活字になつて残されているものに限れば、説話の研究はかなり大きな比重をもつていることになる。ただし、南方の場合、論文として整つた形式の文章は少ないので、その全体については、今のところほかの分野の研究者の利用しやすい形では整理されていない。

ここでは、そのような南方の説話研究がどんな内容のものであつたか。また、その仕事のしかたにはどんな特長があつたか。そのへんの大まかな輪郭をたどつてみたい。

南方の説話研究については、柳田国男がこう語つたことがある。

「熊野時代の南方先生が、其後も引続いて外国の学術雑誌に寄稿し、多分はその御礼の金をまわして、どしどし新刊の書を購読して居られたことは、私よりもっと詳しく知つている人は無いだらう。其文章が更に數十篇、大体に短いものになつて來たようだが、この中には植物学以外の研究が多く、傾向からいいうと先生自ら、説話学と名づけられたものが主であった。それが

私たちには又一つの大きいなる激励であった」

「大藏經の読破と抄出とが、有名な一つ話になつて知られて居るが、其他の部分では東京居住者の、らくに見られるような本も見られず、手に入るものとては只近年の活字本ばかりなので、自然学問の興味が野外採集の方へ、向わざるを得なかつたものと思われる。しかし一方には女の腹に羊をえがく話とか、猫一匹で長者になつた話とか、この期間に外国で公表せられた文章には、珍重すべきものが甚だ多い。御陰で民間説話の研究が、日本では急に朗らかな前途を展開したのであつた」

(ともに『ささやかなる昔』所収「南方熊楠」より)

この文章は、戦後まもない一九四八年に渋沢敬三を会長としてミナカタ・ソサイエティが結成され、やがて最初の全集が乾元社から出される数年前の一九五〇年に書かれたものである。

引用のなかに「先生自ら説話学と名づけられた」とあるが、これは雑誌『郷土研究』の編集方針を批判して書いた一九一四年五月十日付の南方の手紙のなかで、説話学でなく文字を転倒して話説学と書き、ストリオロジーとルビをふつて使つたことをさすのかもしれない。そこで南方は「民俗学が社会学の一部なるごとく、ストリオロジーは単に民俗学の一部に過ぎず、と主張す」と語つていて、伝説や古話の研究も大切だが、それよりはそれぞれの土地に伝わる風習や片言などを大切に記録すべきだという主張を述べている。

また大藏經についていえば、南方はすでに大英博物館でも『法苑珠林』などの漢訳仏典を手にしているが、一九一一年から一三年に

かけては田辺の法輪寺に所蔵されている黄櫈版大藏經を借覧し、抜書をしている。黄櫈版大藏經は、中国・明代の万曆蔵をもとに黄櫈宗の鉄眼が十七世紀に開板したもので、テキストとしては必ずしも良くないとされる。現在一般的に使われる『大正新脩大藏經』が刊行されはじめるのは、その十余年後、一九二四年からであつた。また一九一四年には、あらためて『法苑珠林』の抜書もしている。南方と柳田との文通が始まるのは一九一一年で、柳田が『石神問答』や『遠野物語』を出した翌年にある。まだ日本の民俗学そのものが形をなしていなかつた。そのような時期の柳田にとって、イギリスにいるころから民俗学や説話研究にも関心を抱いていた南方の存在が、「大きな激励」であり、「朗らかな前途」への展望を開くものであつたのは当然であろう。一方、南方の大藏經通覧も、柳田とのやりとりに触発されて始められた可能性がある。

二、比較研究へのまなざし——偶合と伝播

もつとも南方の説話研究についての見解は、この柳田との出会いに少し先立つ時期に書かれた『大日本時代史』に載する古話三則（一九〇八年発表）に、すでに明確に語られている。『大日本時代史』は一九〇七年から一九〇九年にかけて全九冊が早稲田大学出版部から刊行された。南方が日本で発表したものとしては最初のまとまった内容の論文で、その緊張ぶりは文章にもうかがえる。また材料にも執着があつたらしく、後年くりかえし加筆している。

その論文で南方は、同書に見える「本邦著名の古話に、予の注意

を惹けるもの、およそ三つあり」として、米菴上人の話 醍醐天皇

哭声を聞きて婦人の姦を知りたまひし話 毛利元就箭を折りて子を

誠めし話を挙げる。同書の筆者は、第一・第二の話は史実もしくは

史実らしきものとし、第三の話は中国の故事の模造としているとい

う。これに対し南方は、第一はカスピ海地方の類話あげて偶合で

あらうとし、第二はあとである理由で、また第三は『イソップ』

や諸外国に矢を折つて教訓とする話があることから、それぞれ説話

の伝播したものと考えている。その偶合と伝播を説明するために、

南方はさまざまな例を挙げて、つぎのように述べる。

「今諸方の古話を比較するに、遼遠相関せざる地に箇々特生し

ながら、人情と範囲の同じきより、酷似偶合の談を生ぜるあり」

「また、各国の古話を対照するに、一邦に生じて他疆に徙り、
時として風土世態の異なるより、多少の損益変遷を経ながら、
帰化同塵して永住するあり」

その南方の説話をあつかう方法の基礎は、江戸時代の学者たちの

考証と、その源流というべき中国人の仕事で、いわばアジアの学問
にもとづく觀点であった。これにヨーロッパの資料を涉獵して考え
あわせるのが、南方の獨自性となっていた。しかも、なおかつ比較
研究の困難さについて知らないわけではなかつた。

「上の」とく説くといえども、諸古話について一々その源を見

出だすこと、すこぶる難し。東洋において古話を論ぜるもの、

遠くは「漢の」応劭の『風俗通』、唐の段成式の『酉陽雜

俎』、近くは「江戸時代」の蟠龍子「井沢長秀」の『俗説弁』、
蓑笠翁「滝沢馬琴」の『質屋庫』等ありて、その出所を探り、
沿革を詳らかにするに力を致せり」

「近世泰西に比較古話の學起ころに及び、広く材料を地球の諸
部に集め、はるかに系縁を上古の亡国に求むるをもつて、その
種数の浩漫たる、同異の雜糅せる、精力過絶せる人土輩出して、
これに仮すに年月をもつてし、天下一切の諸話を総括整列せる
の後にあらずんば、決してこの譚はこの國に生ぜり、かの談は
かの伝によると確言しえざるを知るに至れり」

その具体的な比較の仕方を、第二の話である『今昔物語』二九の

一四「九条堀河に住む女、夫を殺して哭きし語」についてみよう。

南方はまず段成式の『酉陽雜俎』を引き、この本を「『今昔物語』
より約二三百年前の著にして、その続集巻四、特に貶謫部を設け、多
く旧伝古話の起源と変遷を述べたるは、西人に先立ちて、比較古話
の学に着鞭せしものとして、東洋のために誇るに足れり」と高く評
価している。そして、その巻に見えるつぎの記述を紹介する。

唐代の高官である韓滉が、夜の楼上で酒を飲んでいて、不審な女
の哭声を聞きとがめた。調べてみると、その女は隣人と私通して夫
を釘で殺したのが分かつたという。段成式は、この類話がすでに漢
代の王充（の「非韓」すなわち『韓非子』批判の篇）にあることを
指摘している。

これを引いたあと南方は、『論衡』より二百余年前の『韓非子』
にも類話のあることに言及する（おそらく段成式は自明のこととし

て書かなかつたのだろうが）。さらに『アラビア夜譚』には、両親に死なれまもない豪商の妻の悲歌を聞き、「これ父母を失える声にあらず、別れし男を慕う音なり」と回教主が断定した話のあることにふれて、「人々の音声を聞きて、その心底を察する」ことは、和漢に限らないのだと説く。

はたして女人の泣く声で、その心が読みとれるものか。いささか疑念もあるが、ともすれば説話研究の本筋からはこぼれ落ちてしまいそうな要素に着目し、大まじめに古今東西の異同をたぐりよせ

るのは、まさに南方独特の世界であつた。ふつうの人の見すごしてしまい、そんな材料にこだわり、そこから人情の機微の通じあう糸口を引き出すところに、南方の興味はあつたようと思える。おなじ論文の「毛利元就、箭を折りて子を諒めし話」のなかには、「時千載を差え、道万里を隔つといえども、人情は兄弟なるを証するに余りありというべし」といった形容もある。

ところで、これではまだ単なる偶合としかいえないわけだが、その後で、「（『今昔物語』の話）九条堀河の小家の女のなく声が清涼殿の夜の殿まで達せしこと怪しむべし。かつ、そのころ本邦の婦人、夫死せしを悲しむとも、支那人のごとく大声を放つて叫びしにやいぶかし。もって支那譚を移して延喜帝に托したものたるを知るべし」として、中国の文献に見える説話を日本の話のように作り替えた、すなわち「倭装」であつて、実在した史実ではないだろうと結論している。

死者を哭して大声をあげる風習は、中国や朝鮮にはあるが日本に

はなかつたのではないか、という疑問はもつともである。しかし、偶合か伝播かを弁別するためには、もう少し説得力のある説明が必要がする（この説話をについていえば、状況証拠は伝播を支持するにちがいないが）。そして、この程度の強引きもまた、南方の文章にしばしば見られるものであった。

三、『今昔物語』をめぐつて ——芳賀矢一のことなど

『今昔物語』と南方のかかわり方については、しばらく前に小文を書いたので、そのあらましを紹介し、あわせて多少の補足をしておきたい（新日本古典文学大系『今昔物語』三、月報）。南方の取りあげた日本の説話集では、やはり『今昔物語』がもつとも重要であると思われる。『今昔物語』についての言及は、早期の英文論考にも出てくるし、前節にふれた論文でも扱われている。だが、まとまった記述が見られるようになるのは、柳田国男との文通が始まつて以後のことである。さきにふれた大蔵経通覽も、そのための作業の一環といえよう。

直接には、『郷土研究』創刊号にのつた赤峯太郎（柳田の筆名）の『今昔物語』本朝部の出典研究の呼びかけにこたえて、「川成」と飛騨工と技を競べし語などを書き、本朝部の説話とされるものなかにも、インドや中国の話に由来するものが多いことを指摘したあたりが最初である。

そこで赤峯太郎がふれた数話のなかで、たとえば「百濟の川成と飛騨の工と挑みし語」については、ラルストンの『西藏説話』（一九〇六年）の類話をあげている（これは君島久子訳『チベットのいう鳥』の九話「竜の目をかく」につながる話である）。これに對し南方は、中国で梁代（六世紀）に訳された『經律異相』に『雜譬喻經』から引く類話が見え、さらに五世紀に出た『世說新語』にも同巧の話があるとして、その目くばりの広さをうかがわせる指摘をしている。

ところが、ちょうどそのころ、一九一三年六月に芳賀矢一の『攷證今昔物語集』の第一冊・天竺震旦部が出版された。同書は実際に芳賀の仕事ではなくて協力者の手になつたとも言われるが、かつての大学予備門での級友の名を冠した大著を、南方はどんな気持で手にしたのだろうか。すぐさま挑戦的に書き送ったという感じで、そのうちの十三の話についての欠落をおぎなう『今昔物語の研究』を、南方は『郷土研究』誌上に数回にわたって連載した。

それを読んだ芳賀は、一年後に出た『攷證今昔物語集』の第二冊を南方に贈り、前後して、南方の指摘した項目を（まだ発表していない分をふくめて）最終巻の第三冊に入れさせてほしいと人を介して頼んできた。南方は、自分は予告どおり『郷土研究』に続きを発表するだけで、あとことは同誌の編集者（すなわち柳田）にまかせるとして、事實上拒絶の態度を示したらしい。柳田は芳賀とも面識があつたので、この処理には苦慮したにちがいない。その後の経過は不明だが、七年後の一九二一年にようやく出た第三冊の附録の

なかに、芳賀は自分の補遺と混在させる形で、南方の指摘した項目のすべてを何の断りもなしに収録していた。

一九二三年、植物研究所設立の募金のため上京した南方は、芳賀矢一が學長になつた国学院大学から講演を依頼された。日程を一日のばしてもらつたあげく、南方は泥酔して壇上にあがり、百面相をしただけで講演はしなかつたらしい。日記によると「芳賀博士」と中山太郎と折口信夫が同席したという。

『今昔物語集』三の月報を書いたさい、わたしは『攷證今昔物語集』第三冊の扱いに憤懣やるかたなく、南方がそのような行動に及んだのではないかと書いた。その後、南方家に残つてゐる『攷證今昔物語集』第三冊を見ると、見返しにベン書きで、「謹呈 南方賢兄 大正十一年五月 著者」とあり、国学院大学を訪ねたさいに贈られたことが記されていた。この第三冊が奥付どおり前年八月に出了とすれば、南方が入手していないはずはないと思われるが、実際のいきさつはもう少し入りくんでいるのかもしれない。

一九二七年に芳賀矢一は亡くなるが、その前年に最初の著者『南方隨筆』が出る前後から、南方はしばしば芳賀に対する非難を知人の手紙に書きつけるようになる。自分の文章での民俗的な記述についても話者の名を記すことを忘れない南方は、芳賀のプライオリティ無視に腹を立てていた。一九二六年一月、中山太郎に書き送った手紙では、『今昔物語出所考』について、

「これは『郷土研究』に連載せし分を芳賀博士の『參攷今昔物語』に転載、そつくり頂戴されて、全篇に小生が作ったものと

も、拝借したとも一辞の言いわけなし。實に博士に似合わぬ卑

劣な仕方と存じ候ゆえに、その後分を何も出さず秘藏しあり。よつてお望みならその後分をも進上するから（下略）』と、まだ書きたい気持のあることを語つてゐる。

平凡社版全集の索引によると、南方の『今昔物語』への言及は六十二話にわたつており、そのうち話の來源に關する指摘は十数話となつてゐる。ところが、南方家に残された『攷証今昔物語集』全三冊への書き込みは百数十話に及んでおり、かなり詳細な項目もあることから南方の関心が長く持続してゐたことをうかがわせる。書きあげた文章が「秘蔵」されていたわけではないが、文章化できる可能性がありながら、そのまま放置された書き込みが相当あることは確かであろう。（いづれ機會があれば、その書き込みを活字にして紹介したいと考えてゐる。）

四、中国の説話について——『酉陽雜俎』など

南方との關係で注目される説話集が、日本では『今昔物語』だとすれば、中國では唐代の段成式（八六三年没）によつて編纂された『酉陽雜俎』ということになるだらう。『酉陽雜俎』は、一言でいえば唐代の知的世界を網羅した百科事典的な書物である。わたしは「熊楠の親しんだ中國の古籍」（『現代思想』一九九二年七月号。新文芸読本『南方熊楠』に再録）でも一般的な紹介をしており、また今村与志雄の詳細な注記をそえた全訳が平凡社の東洋文庫から出

ているので、ここでは概略を述べるにとどめたい。

南方家に残されている『酉陽雜俎』全五冊は、江戸時代に出された和刻本（一六九七年）で、大学予備門のころに購入してゐる。回想によると、十五、六歳のころ、すなわち和歌山中学の在学中にも手にしたらしい。当初は動物や植物の記述に対する関心が中心であつたようだ。しかし、民間説話の語り口に忠実な記録としては、中国でもっとも古い記述が何篇か収められているために、口承文芸の研究史の上でも貴重な文献である。また、すでに第二節で南方の評価を引用したように、説話の比較研究ともいふべき視点から編集されている卷もある。

隋・唐代に先立つ六朝時代には、『搜神記』などの「志怪小説」と呼ばれる書物群があり、このなかにも民間説話の記録と見られるものが数多くある。しかし、いづれも簡略化された梗概に過ぎず、『酉陽雜俎』の記録とは質的な違がある。『酉陽雜俎』に見える代表的な民間説話である「旁龜とその弟一新羅」と「葉限—中国のシンデレラ」は、今村与志雄訳の『唐宋伝奇集』下（岩波文庫）でも読むことができるが、この二つの話は、文学史的に「志怪小説」の延長上に位置づけられる「伝奇小説」とはいえない。「伝奇小説」は「志怪小説」のような伝承された物語に、知識人によつて創作の手が加えられた「クイクション」をさす用語だからである。

よく知られているように、『酉陽雜俎』の「葉限」は、シンデレラ型のととのつた昔話としては世界でもっとも古い記録である。イタリアのバジーレやフランスのペローによる記録は、いづれも十七

世紀、ドイツのグリムは十九世紀だから、『西陽雜俎』の九世紀とは大きな隔たりがある。しかも、段成式の家の使用人であった李士元という男が語ったと明記されている。李士元はいまの広西チワン族自治区の南寧にあたる邕州の出身だといふが、この地方や国境を接するベトナムでは近年もシンデレラ型の昔話が多く採集されていて、伝承の連続性が想定される。

南方はアメリカにいた二十代の前半に『西陽雜俎』の和刻本を読んでシンデレラ型の話があるのに気づき、一九一一年に「西曆九世紀の支那書に載せるシンダレラ物語」を書いた。その時、南方はヨーロッパのシンデレラ型の話でどの記録が古いかはよく分からぬと記している。したがって、中国に伝わる話の年代の古さを指摘しただけで、伝播関係については何も述べていない。

また「新羅」の話は、当時の朝鮮半島で語っていた昔話の記録である。唐代の中国には多数の朝鮮人が移住していたから、その人たちから聞きとった可能性もある。江戸時代に、すでに山東京伝が『宇治拾遺物語』にある「瘤取り」のもの話ではないか、と『骨董集』に書いている。しかし、「新羅」の話は「瘤取り」と共通する要素も持つてはいるけれども、むしろ現代の朝鮮や中国に伝わる昔話のいくつかの型に近い関係にある。

南方は、これら朝鮮や中国の類話については知らなかつたが、インドやモンゴルに伝わる『シッディキユル』説話群のなかに同系統の話があることに気づいて、その伝播経路の推定をしている。南方の見解は「鳥を食うて王になつた話」（一九二二年）や「一寸法師

と打出の小槌」（一九二六年）などに記されている。

このほか、短い話ではあるが、『日本昔話大成』四八「薦不幸」や朝鮮・崔仁鶴のタイプ八「雨蛙の嘆き」とつながる「渾子」のことは、「親の言葉に背く子の話」（一九一八年）で述べている。

また、いかにも南方ごのみらしい話としては、「美人の代りに猛獸」（一九三〇年）や「女と畜生を入れ換えた話」（一九三九年）で言及されている。「寧王」がある。これは有名な玄宗皇帝の兄が登場人物となっており、実際にあった話のように記されているが、A T八九六に相当する昔話で、朝鮮・崔仁鶴のタイプ二二九「僧の惡行」や「日本昔話大成」一二二「嫁の輿に牛」につながる。南方はお伽草子の「ささやき竹」がその翻案であることを指摘し、さらにインドの古い説話のなかから類話をさがしをしている。

以上が『西陽雜俎』から南方が取りあげた主要な話である。ところで「西曆九世紀の支那書に載せるシンダレラ物語」という論文は、サブ・タイトルに「異なる民族間に存する類似古話の比較研究」とあって、第二節で紹介した「『大日本時代史』に載する古話三則」を引き継ぐ意図で書かれたと思われる。そこでは、日本に移入された外国の話として、「ソロモンの裁判」のアジアでの類例、百合若とギリシアのウリッセスとの相似説などにふれ、さらに東洋の古話が西洋より古い例として、冒頭に引いた柳田の回想にも出てくる「羊を女の腹に書きし話」を挙げている。

この話について南方はかなり愛着があつたらしく、一九一〇年に英文で論文を発表し、同時に地元の『弁畫新報』にも書き、翌年の

シンデレラの論文でも言及し、翌々年には柳田あての手紙でも質問し、さらにはかの文章でも引用している。「女の腹に羊を画く」という呼び方は、十六世紀のイギリスの話に由来する。妻の不貞を案じた画工が、旅に出る前に妻の腹に角のない羊を画いておき、帰つてみると（若い商人と不貞をしたため）角のある羊に変わっていたという笑話である。

南方がイギリスの知人で「笑談学（ファセチオロジー）」の大作家リード氏に尋ねたところ、イタリア、フランス、ドイツ、イギリスにある類話は、いずれも十六世紀以後のものであった。ところが、十三世紀（から十四世紀初め）に完成した『沙石集』には、臥した牛を画いておいたところ、起き上がりつた牛になっていたという話が載っているから、ヨーロッパより三百年ほども古いとする。

また紹州でいまも語られている話では、クツワのつい馬がクツワのない馬に変わったために責められた妻が、馬も豆を食う時にはクツワを外すものだと夫に言い返すという。「この型の諸譚、一源より出たか數々に生じたか知らぬが、記録に存する最も古きは日本の物と見る」（「馬に関する民俗と伝説」）というのが南方の立場であり、それは「葉限」の話の場合と同様であった。

これと同巧の話が二つ、中国の清代に編まれた『笑林廣記』にもある。それに気づいた南方は、柳田あてた一九一〇年三月二十九日付の手紙に、その二つの「蓮根を掘るうとして蓮の花が散る」話の原文を書き写し、口語的な表現が分からぬからと解説を依頼する。返事は数日後に高木敏雄からとどき、「小生の解と大体同じ」

であったと南方は言う。このあたりのやりとりは、かねてから猥雑な内容の話への嫌悪を明言していた柳田に、南方がわざわざ書き送つたらしい気配も感じられる。

このほか南方が中国の説話集から取り出してみせた話で、いかにも南方らしい着眼点が生きている例を二つ挙げておく。（これについては、以前に『南方熊楠選集』別巻の解説でふれたことがあるので、その記述を使わせていただく。）

関敬吾の『比較研究序説』（著作集第六巻）所収の「日本ニアジア地域の昔話の平行関係」という覚書の末尾にある「AT二四〇〇一枚の皮の面積」は、牛の皮一枚の面積の土地を要求してから、皮を細切りにして拡大し、広い土地を手に入れてしまふ話だが、柳田の「神を助けた話」を引いて日本の数例を挙げているにすぎない。

しかし、南方の書いた「少しばかりをうそて広い地面を手に入れた話」（一九一四～二六年）では、アフリカ北岸にカルタゴ国がつくられる時の例を挙げ、さらに仏典の『阿育王伝』や『入唐求法巡礼行記』などから、僧侶の坐るだけの場所を求めて広大な土地を入れ手するインドと中国の話を引いている（近年、雲南省大理市付近に住む白族からも、仏教弘法のさいの類話が多数採集されている）。

柳田の「神を助けた話」で牛の皮の話が「世界中に分布して居る」と注記しているのは、南方とそれにつづいて発表された伊能嘉矩の文章をもとにしたのであるう。

さらに南方が増補のなかで、『明史』にある呂宋の仏郎機（ラソン・ランキ）（スペイン人あるいはポルトガル人の話と、『聊齋志異』にある紅毛人

(オランダ人)の話を拾い出しているのは、さすがに慧眼である。

中国に伝えられる話は、このように仏教にならむものとヨーロッパ人の侵略のさいの出来事とするものとに二分される。日本には、その前者が伝えられたのではないかろうか。とすれば、柳田が仏教の渡

来以前から日本の田舎にあった話としているのは疑わしい。

また同じく閔の覚書にある「AT九六〇Aイビコスの鶴」で、ギリシア、トルコ、オリエント、インドを挙げながら、中国や朝鮮にふれていない。これも南方の「泡んぶくの敵討」(一九三〇年三月)によると、宋代の『夷堅志』などからいくつかの話が引かれしており、雨の降るさいの泡んぶくが機縁で旧悪が露見するという奇異なモチーフの中国の話が、日本の土橋里木『甲斐昔話集』の類話にきわめて近接した関係にあることが分かる。このモチーフは、朝鮮では崔仁鶴のタイプ四一〇「烈女の死」となつており、「日本昔話大成」三三「こんな晩」とも通じあつていて。

これらのようともすれば伝承的な説話の世界からは取り残されてしまい、そうな境界領域のモチーフにも、一方ならぬ関心を寄せている点に南方の特長があつたといえよう。

五、漢訳仏典の利用について

中国語に訳出された膨大なインドの仏典は、もちろん仏教の弘法のためのものであつたが、同時にかなり異質なインドの文化を中國大陸に持ちこむことになった。そこにふくまれた説話群が、中國

ひいては朝鮮や日本の文学に与えた影響は測りしれないものがあった。漢訳仏典の集成である大藏經を通覧した南方は、さきにふれた『今昔物語』を始めとする説話集の比較にとって、その作業が不可欠のことであることを知っていた。

いまここで南方の漢訳仏典への関心の全体像を紹介する余裕はないが、一つだけ書きそえておきたい。南方が漢訳仏典のなかから読み取ろうとしたのは、説話の重要なモチーフだけではなく、そこに見られるインドの僧侶たちや一般民衆の生活文化のティーリーであつた。とりわけ男女の愛の葛藤や性的交渉のさまざまな形には、あくことなき興味を抱き、自分の文章のなかに取り入れていた。

また南方が、ヨーロッパ中心の説話研究に対し、アジアに集積されている説話群についての知見を提出しようとすれば、どうしても漢訳仏典に埋もれている説話の発掘に向かわざるをえない事情があつた。その一例が、冒頭の柳田の回想にも出てくる「猫一匹の力に憑つて大富となりし人の話」である。これは英文の論文として一九一年に発表していた内容を、柳田の勧めで翌一九一二年に当時の代表的な総合雑誌『太陽』に掲載したもので、のち一九二四年にも「鼠一匹持つて大いに富んだ話」でふれられている。

これもまた南方としては、かなり本格的な論文であつて、イギリスで有名な「ホイッティングトン」の物語が、もとインドの仏教徒のあいだで鼠の話として語られていたものが、回教徒を経由してヨーロッパにもたらされて猫の話になつたきさつを、詳細にたどつている。その論文の末尾で、南方はこう記す。

「以上、予はまことに古印度に行われたる鼠金舗主の話を述べ

によつて命終わる」（趙宋・智覺禪師集『宗鏡錄』七三）

（唐・義淨訳『根本說一切有部毘奈耶』卷三二）、次に仏徒と回教徒が鼠と猫とに対する感想の異なる所以を序せり。読者これによつてまさに知るべし。仏徒間に初めて行われたる鼠が人を富ませし物語が、回教徒の手を経て変態し、ついに歐州に入つて、ホイッティング等、『猫で成り金の譚』^{もがたり}と成りおわれるを。けだし回徒特に猫を好愛するより、これをもつて仏徒談中の鼠に代えたるなり。両譚その源を異にせざるは、共通似の箇所歟、なからぬを見て明らかむべし。すなわち主人公の最初貧しく暮らせこと、その暴富は、ある一獸と、航海貿易によること、終りにかつて自分に不信切なりし人の娘を娶りしこと等なり」

これは主要なモチーフの来源が、漢訳仏典の探索をまつて始めて明らかになつた例であるが、最後に南方の意外に新鮮な読み取りの例をあげておこう。鴨長明『発心集』卷八に、「唐土に御門坐しけり」として語られている「盜人 灰を食いし話」について、南方は一九一三年に書いた文章で馬鳴菩薩の『大莊嚴經論』から類話引き、さらに同年の「追加」で「趣向が別な奴」として、つぎのよくなエピソードを挙げている。

「饅饉の歳、小児、母に従いて食を求め、啼きて止まず。母つに砂の嚢を懸け、詫つてこれは飯なりと言う。児、七日そゝの嚢を諦視し、これ飯なりと將へり。その母、七日の後に解き下ろしこれを視す。その児、その砂なるを見て絶望し、これ

「世に伝えて言うあり。むかし、ひとりの父あり。時に饅饉に遭い、他方に造らんと欲す。みずからすでに飢え羸れ、二子嬰稚し。携え去かんと意欲するも、力の任せざるところなり。嚢をもつて灰を盛り、壁上に掛け、二子に慰め喩し、これ麺の囊なりと言う。二子、希望して、多くの時命を延ぶ。のちに人の至るあり、嚢を取つて為に開く。子はその灰なるを見て、望み絶えてすなわち死す」（世親菩薩『阿毘達磨俱舍論』卷一〇）南方はさらに、後者の引用につづいて、「大海で難船絶食した商人が、はるか距てで大きな沫の積もつたのを陸地と誤認し、著岸を望んで長時生き延びた」という話のあることにもふれる。

これによつて南方が、説話というものの持つ本来的な力、あるいは意味というものを、どう考えていたか、どう読み取つていたかといふことが、よく分かると思う。いささか尻すぼみの形になつてしまつたが、これで終りとしたい。

（一九九三年六月五日、日本口承文芸学会大会で講演）
（いいぐら・しょうへい／東京都立大学）